

大学における英語中心主義を 生き延びるための留学生日本語教育と ＜やさしい日本語＞

一橋大学国際教育センター教授 庵 功雄

isaoiori@courante.plala.or.jp

<http://www12.plala.or.jp/isaoiori/>

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化
 - ◆ 1. 学習者の変化
 - ◆ 2. 大学の留学生獲得戦略の変化

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- ◆ 1. 学習者の変化

- 日本語で職に就くことを目指す「日本語エリート」(野田尚史)が多数派ではなくなる

- ← 留学生センターの設立趣旨

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- ◆ 1. 学習者の変化

- 日本語で職に就くことを目指す「日本語エリート」(野田尚史)が多数派ではなくなる

- 日本語学習を(中心的な)目的としない学習者が多数派になる

- **日本語学習の動機付け(motivation)をどう確保するか**

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- ◆ 1. 学習者の変化

日本語学習を(中心的な)目的としない学習者が多数派になる

→日本語学習の動機付け(motivation)をどう確保するか

(対策1) サバイバルジャパニーズ中心にする

→日本語教育の専門性を自己否定することになる

→リストラ(座布団の取り上げ、昇進停止など)の口実を
大学当局に与えることになる

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化
 - ◆ 2. 大学の留学生獲得戦略の変化
 - ✓ 大学の国際ランキングを上げたい
 - 英語で授業をやらないと優秀な留学生は集まらない
 - 留学生の教育は英語で行うべき(英語シフト)
 - ✓ 日本人学生の海外送り出しを重視する
 - 交流学生が増える
 - 日本語学習の動機付けが低い学習者が増える

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

1. 学習者が「日本語エリート」ではなくなる

→日本語学習の動機付けが高いとは限らない

2. 学内での「英語シフト」の圧力

→留学生センターが生き残るには、「日本語で教育を行っても英語とそれほど変わらない速さで成果が得られる」ことを証明する必要がある

→日本語教育についての考え方を抜本的に見直す必要がある

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

- 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

1. 学習者が「日本語エリート」ではなくなる

2. 学内での「英語シフト」の圧力

→日本語教育についての考え方を抜本的に見直す必要がある
(なぜ?)

日本語教育、日本語学の学位を取った人間が安定的に研究を続けられるためにはテニア(任期なし)のポストに就ける必要がある(「恒産無くして恒心なし」孟子)

→今、この2つの学問分野の職は事実上、留学生センターに限られている

→留学生センターのポストを失うことは、これらの学問分野が減ぶことを意味する

1. 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

• 留学生日本語教育を取り巻く環境の変化

日本語教育、日本語学の学位を取った人間が安定的に研究を続けられるためには、その人たちがテニア（任期なし）のポストに就ける必要がある（「恒産なくして恒心なし」孟子）

→ 留学生センターのポストを失うことは、これらの学問分野が滅ぶことを意味する（人文系の学問全体にとっての課題）

（どうすればいいか？）

→ **日本語教育に対する考え方を抜本的に見直す**

→ 〈やさしい日本語〉の考え方が利用できる

→ 本発表の趣旨

2. 〈やさしい日本語〉について

- 「やさしい日本語」という考え方
- 阪神淡路大震災時の外国人への情報提供 (cf. 佐藤2004)
 - → 減災のための「やさしい日本語」
- 〈やさしい日本語〉の誕生
 - 平時における定住外国人(主に成人)への情報提供
 - → 本発表における〈やさしい日本語〉

2. 〈やさしい日本語〉について

- 2種類の〈やさしい日本語〉
 - ◆ 1. 居場所作りのための〈やさしい日本語〉
 - ◆ 2. バイパスとしての〈やさしい日本語〉
- 詳しくは、庵(2016b)参照

2.1 居場所作りのための〈やさしい日本語〉

◆ 1. 居場所作りのための〈やさしい日本語〉

→ 定住外国人が日本社会の中で安定した形で生活できるための環境作りという側面から見た〈やさしい日本語〉

→ 3つの側面

- a. 初期日本語教育の公的保障の対象としての〈やさしい日本語〉
- b. 地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉
- c. 地域型初級としての〈やさしい日本語〉

2.1 居場所作りのための〈やさしい日本語〉

◆ 1. 居場所作りのための〈やさしい日本語〉

→定住外国人が日本社会の中で安定した形で生活できるための環境作りという側面から見た〈やさしい日本語〉

→3つの側面

- a. 初期日本語教育の公的保障の対象としての〈やさしい日本語〉
- b. 地域社会の共通言語としての〈やさしい日本語〉
- c. 地域型初級としての〈やさしい日本語〉

→「**母語で言えることを日本語で言える**」ことを目指す(イ2013)

→体系性と簡潔性が必要

→地域型Step1, 2(ミニマムの文法)

2.2 バイパスとしての〈やさしい日本語〉

- 〈やさしい日本語〉の対象を拡張する必要性
- ◆ 言語的少数者に対する言語保障という観点
 - a. 外国にルーツを持つ子どもたち
 - b. ろう児
 - 共通点：日本語は第二言語である
 高校進学率が低い
 - **バイパスとしての〈やさしい日本語〉**
 - 新しい文法シラバス

3. 文法シラバス見直しの必要性

- 現行の文法シラバスの特徴
 - ◆ a. シンタクスに関わる項目は初級で終わり
 - ◆ b. 中級以降は複合辞を扱う

- 現行の文法シラバスの弊害
 - ◆ a. 不必要な項目が多すぎる問題
 - ◆ b. 必要な項目が取り上げられていない問題

3. 文法シラバス見直しの必要性

現行の文法シラバスの弊害

◆ a. 不必要な項目が多すぎる問題

理解レベルと産出レベル(文法、語彙)

理解レベル: 意味がわかればいいもの

産出レベル: 意味がわかった上で使える必要があるもの

ex. 「事由」と「理由」

→ 産出のための文法(庵2011, 2015a, 2016a)

3.1 unnecessary項目が多すぎる問題

現行の文法シラバスの弊害

◆a. unnecessary項目が多すぎる問題

Ex. 推量の「でしょう」(庵2009)

- 概言(寺村1984)を表す形式として、「と思います」と「でしょう」が取り上げられているが、推量の意味の「でしょう。」は天気予報以外ではほとんど使われただけでなく、次のような「カチンとくる」誤用(野田尚史)を生みかねないという点で、初級で導入してはいけない
-
- (5) (推薦状の締切を問い合わせたメールへの返信)
 - 締切は来週の金曜日です。来週の水曜日までにいただければ
 - いい{??でしょう／と思います}。

3.2 必要な項目が取り上げられていない問題

現行の文法シラバスの弊害

◆b. 必要な項目が取り上げられていない問題

ex. 「自他の対応」が「ている」「てある」の使い分けと関連して
導入される

→定量的にも成り立たない(中俣2011)

→理論的にも成り立たない(益岡1987)

→自他の対応の真の意味が教えられないままになっている
(庵2013)

その他、テンス・アスペクト、「のだ」、「は」と「が」など、重要な
初級文法項目が産出に結びついていない(庵2012)

4. 新しい文法シラバス

- 新しい学校型文法シラバス

- ◆ a. 初級文法シラバス

- ◆ b. 中上級文法シラバス

→初級前半 (Step1)、初級後半 (Step2)、初中級 (Step3)、
中級 (Step4)、中上級 (Step5)、上級前半 (Step6) を見通
して設計されている。

4.1 初級文法シラバス

- 新しい学校型文法シラバス

- ◆ a. 初級文法シラバス

- 3.2.1の地域型初級にもとづき、「母語で言えることを日本語でも言える」ことを目的に、日本語の階層構造(南1974、仁田1995)にもとづき、「1機能1形式」を原則にシラバスを作成(庵2015b)。

- (6)格 語幹 ボイス アスペクト 肯否 テンス 対事的 対人的

- モダリティ モダリティ

- てもらう てい ない た と思う よ

- (7)付帯状況節*、中止節(テ節)、因果関係節(条件節、譲歩節*、

- ながら て たら ても

- 理由節)、時間節、接続節(逆接節、並立節*)

- から／ので とき けど し

4.2 中上級文法シラバス

- 新しい学校型文法シラバス
- ◆ b. 中上級文法シラバス
- 初級で統合的 (syntagmatic) に配列された文法項目を範列的 (paradigmatic) に拡張していくものとして設計 (庵2015c、近刊)。
- <条件の場合>
- (8)とすれば／としたら／とすると Step5(中上級)
- なら／のだったら Step4(中級)
- ば Step3(初中級)
- たら Step2(初級後半)

4.2 中上級文法シラバス

- 新しい学校型文法シラバス
- ◆ b. 中上級文法シラバス
- 初級で統合的 (syntagmatic) に配列された文法項目を範列的 (paradigmatic) に拡張していくものとして設計 (庵2015c、近刊)
- → 初級はある程度、制限コード (restricted code) であっても、レベルが上がるごとに、**精密コード** (elaborated code) を身につけていく。産出レベルの項目をレベル別に決め、使える必要がある
- 項目にもとづいて、「大人の言い方」ができるようにする

5. 言語習得観の転換(初級)

- 留学生日本語教育を取り巻く状況の変化とそれに対抗するための新しい日本語教育の考え方の必要性
- →「初級」に関する考え方の転換

5. 言語習得観の転換(初級)

- 留学生日本語教育を取り巻く状況の変化とそれに対抗するための新しい日本語教育の考え方の必要性
- →「初級」に関する考え方の転換
- <文はどのように作られるのか？>
- 太郎が 喫茶店で コーヒーを 飲んでいる。(横の関係＝文法)
- ↓ ↓ ↓ ↓ (縦の関係＝語彙)
- →横の関係である「文法(文型)」は、思考を言語化するための「鋳型」を提供し、縦の関係である「語彙」が実際のさまざまな文を作り出す

5. 言語習得観の転換(初級)

- 「初級」に関する考え方の転換
- <文はどのように作られるのか？>
- 太郎が 喫茶店で コーヒーを 飲んでいる。(横の関係＝文法)
- ↓ ↓ ↓ ↓ (縦の関係＝語彙)
- 横の関係である「文法(文型)」は、思考を言語化するための「鋳型」を提供し、縦の関係である「語彙」が実際のさまざまな文を作り出す(cf. 林(1960=2013)、庵(近刊))
- 重要なのは、「語彙」であって「文法(文型)」ではない

5. 言語習得観の転換(初級)

- 「初級」に対する考え方を変える必要性

	これまで	これから
文型	変数(どんどん増やす)	定数(あまり増やさない)
語彙	定数(あまり増やさない)	変数(制限をかけない)

5. 言語習得観の転換(初級)

- 横の関係である「文法(文型)」は、思考を言語化するための「鑄型」を提供し、縦の関係である「語彙」が実際のさまざまな文を作り出す(cf. 林(1960=2013)、庵(近刊))
- →重要なのは、「語彙」であって「文法(文型)」ではない
- →文法を「定数」とし、語彙を「変数」とする
- →最低限必要な文型を導入した後は、語彙に制限をかけずに、学習者が述べたい内容を述べさせる
- ←『にほんごこれだけ! 1, 2』(庵監修2010, 2011)
- Ex. AはBです。
 - a. 私はマイク・ミラーです。(『みんなの日本語・初級1』)
 - b. 日本経済の課題は財政再建です。

5. 言語習得観の転換(初級)

- 最低限必要な文型を導入した後は、語彙に制限をかけずに、学習者が述べたい内容を述べさせる
- →教師は、学習者の意図を理解しつつ、そこに現れるさまざまなレベルの逸脱(deviation)に対応する(「荒れ球を受け止められるキャッチャー」)になる
- (なぜ必要?)
- 1. 学習者にとって、自らが産出したテキストなので、そこには
- 真正性(authenticity)がある
- →**学習者の動機付けを高められる**

5. 言語習得観の転換(初級)

- 教師は、学習者の意図を理解しつつ、そこに現れるさまざまなレベルの逸脱(deviation)に対応する(「荒れ球を受け止められるキャッチャー」になる)
- (なぜ必要?)
- 2. コンピューター化(computerization)と語学教師
- ←AI(人工知能)やCAIの発達で語学教師が不要になる可能性がある(Cf. Frey & Osborne 2013、今井2015)
- →「予定調和」の授業を行うだけなら、専任職で人間を雇う必要はない
- →**授業を真の意味で真正な(authentic)ものにできない限り、留学生センターのポストは守れない**

6. まとめ

- (問題のありか)
- 留学生センター／教育を取り巻く状況の変化
 - 1. 学習者の質の変化
 - 2. 大学の「英語シフト」
- →留学生センターがこの流れに対抗して日本語教育の専門性を主張できなければ、留学生センターの教員ポストは守れない
- →日本語教育、日本語学という研究分野が存続できなくなる

6. まとめ

- (本発表における解答案)
- 1. 文法シラバスの見直し
- 2. 言語習得観の転換(特に初級)
- →「文法(文型)」は「鑄型」であり、具体的な文を作り出すのは「語彙」である
- →文型とは、心中の想が言語化されるに際して、想の流れに一応のまとまりをつけるために、支えとして採用される、語の並びの社会的慣習である(林(1960=2013))
- →文法(文型)のバリエーションを増やすのが習得なのではなく、限られた文型(産出レベル)を使って、自らの「想」を表現することが習得につながる

6. まとめ

- (本発表における解答案)
- 1. 文法シラバスの見直し
- 2. 言語習得観の見直し(特に初級)
- →「文法(文型)」は「鋳型」であり、具体的な文を作り出すのは「語彙」である
- →文法(文型)のバリエーションを増やすのが習得なのではなく、限られた文型(産出レベル)を使って、自らの「想」を表現することが習得につながる
- →語彙に制限をかけず、学習者に自らの「想」を日本語で表現させることで、「成功体験」を得させる
- →教師の役割は「荒れ球を受け止められるキャッチャー」

6. まとめ

- (本発表における解答案)
- 1. 文法シラバスの見直し
- 2. 言語習得観の見直し(特に初級)
- →語彙に制限をかけず、学習者に自らの「想」を日本語で表現させることで、「成功体験」を得させる
- →教師の役割は「荒れ球を受け止められるキャッチャー」
- →「予定調和」を外れ、「荒れ球を受け止められるキャッチャー」になることが、日本語教師の専門性を「可視化」することになる
- →AI化、コンピューター化の中でもポストを守りうる

6. まとめ

- (本発表における解答案)
- 1. 文法シラバスの見直し
- 2. 言語習得観の見直し(特に初級)
- 3. 学校型Step1(初級前半)～6(上級前半)をもとに、文法、語彙、漢字を積み上げ、2年(～2年半)で、上級まで進める総合教科書を開発する
- →2年生終了までに、日本語でも英語でも専門が学べる力を身につけさせる(日英デュアルトラック)
- →「日本語で教育を行っても英語とそれほど変わらない速さで成果が得られる」ことを証明する
- →英語シフトの中でも、留学生センターがポストを守りうる

参考文献

- 庵 功雄(2009)「推量の「でしょう」に関する一考察」『日本語教育』142
- 庵 功雄(2011)「100%を目指さない文法の重要性」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 庵 功雄(2012)「新しい文法教育のパラダイム構築のための予備的考察」『日中言語研究と日本語教育』5、好文出版
- 庵 功雄(2013)『日本語教育・日本語学の「次の一手」』くろしお出版
- 庵 功雄(2015a)「「産出のための文法」に関する一考察」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版
- 庵 功雄(2015b)「日本語学的知見から見た初級シラバス」庵功雄・山内博之編『データに基づく文法シラバス』くろしお出版.
- 庵 功雄(2015c)「日本語学的知見から見た中上級シラバス」庵功雄・山内博之編『データに基づく文法シラバス』くろしお出版.
- 庵 功雄(2016a)「産出の文法から見た「は」と「が」」庵功雄・佐藤琢三・中俣尚己編『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版
- 庵 功雄(2016b)『やさしい日本語—多文化共生社会へ』岩波書店.
- 庵 功雄(近刊)「日本語教育から見た『基本文型の研究』」庵功雄・石黒圭・丸山岳彦編『時間の流れと文章の組み立て—林言語学の再解釈—』ひつじ書房
- 庵 功雄監修(2010, 2011)『にほんごこれだけ！ 1, 2』ココ出版
- 庵 功雄・イ・ヨンスク・森 篤嗣編(2013)『「やさしい日本語」は何を目指すか』ココ出版

参考文献

- 今井新悟(2015)「大規模e-learning教育と日本語教育の未来」『ことばと文字』4、くろしお出版
- イ・ヨンスク(2013)「日本語教育が「外国人対策」の枠組みを脱するために」庵・イ・森編(2013)
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中俣尚己(2011)「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房
- 仁田義雄(1995)「日本語文法概説(複文・連文編)」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版
- 林 四郎(1960=2013)『基本文型の研究』ひつじ書房から復刊(2013)
- 益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- Frey, Carl Benedikt & Osborne, Michael A.(2013) “The Future of Employment: How Susceptible Are Jobs to Computerisation?” Oxford Martin School.